

## 企画展の御案内

第26回企画展

# 「牡丹の意匠展」

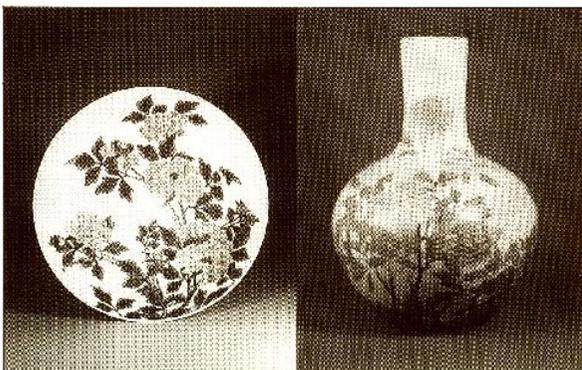
会期：平成2年4月10日(火)～6月10日(日)

会場：当館企画展示室

### ■牡丹の意匠展

中国を原産とする牡丹花は、唐時代から花としての本格的な栽培觀賞がはじまり、多くの詩にも詠まれました。牡丹はその華麗さと豪華な雰囲気から百花王ともまた富貴花ともほめたたえられています。しかし現実の花としての牡丹が陶磁器の装飾文様として登場して来るのは五代から北宋にかけてのようで、それまでは牡丹などの豊かなイメージを反映する空想の花としての宝相華文が中心でした。北宋の頃には、越州窯、磁州窯、定窯、耀州窯、龍泉窯などで牡丹文が見られます。元から明にかけては青花の装飾様式の一つとして使われ、清時代になると一層写実的なものとなりました。朝鮮半島では高麗時代に盛んに牡丹文が登場し、日本においては平安時代に猿投窯に牡丹文がみられますが、本格的に定着するのは江戸時代になってからです。

(D)



染付牡丹文皿 鍋島(江戸時代)

粉彩牡丹花瓶 (清時代・雍正)

### お知らせ

第17回講演会を下記の如く開催いたします。

日時：平成2年4月21日(土)

午後2時～4時

場所：中之島中央公会堂・3階中集会室

講師：京都大学名誉教授 塚本洋太郎氏

演題：「牡丹の美術(仮題)」

当日は1時より受付いたしますので、会員証をご提示下さいませようお願い申し上げます。多数ご参加下さい。

### 新カタログ「牡丹の意匠」発売中!

ページ数は16ページ、掲載作品はすべてカラー図版、618円(税込み)で販売いたしております。又、カタログ郵送をご希望の方は、「牡丹の意匠展カタログ希望」とお書き添えの上、現金書留で868円(送料込)をお送り下さい。お問い合わせは、友の会事務局まで。(TEL 06-223-0055)

### 次回企画展予告

第27回企画展

朝鮮陶磁シリーズ15

# 「三島暦手展」

平成2年6月26日(火)～9月30日(日) 当館企画展示室

### 編集後記

ついに待望のオフィスコンピューターが、当館にも導入されました!

おかげさまで今年度の会員数も順調に増え、ただ今友の会では会員の方々のデータ入力の本最中です。早く軌道にのせ、会員証制作がスムーズに進み、皆様のお手元にすぐお届けできるようにガンバってまいります。が、不慣れた私達がコンピューターを壊さないように、気づかい、打ち込んでおりますので、時間がかかり思うように進まない今日このごろです。(A.T.)

1990年4月7日発行(年4回)Vol.5-4(通巻19号)

大阪市立東洋陶磁美術館



# 友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.19

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

## 美術館の舞台裏 (16)

今回は、当館のビデオ番組の制作についてご紹介しましょう。当館では年3回企画展を開催していますが、それはやきものを特定のテーマによって専門的にとらえ、より深い知識と理解を得て頂くためのものです。常設展と同様、企画展に何を取り上げていくかが美術館の活動のもっとも重要な部分であることは言うまでもありません。当館ではそれらの企画展の内容を記録し、また再現することにも重点を置いています。企画展の都度、小冊子ながら記録を発行していることも、そうした考えのあらわれですが、ビデオ番組の作成もその一環として考えています。ビデオに録画することによって企画展の内容が再現でき、効率の高い教育素材となるばかりでなく、記録とともにその集積は、美術館活動の歴史を形づくっていくことにもなります。

ビデオ番組の制作は、展示作品の中からさらに10数点の作品を選びだし、テーマに沿った展開の順序を決めることから始まります。次は撮影。これはプロの人たち、すなわち監督、カメラマン、照明、録音技師などのチームによって進められ、私たちが立ち合って作品の見所、その提示の仕方などをアドバイスしていきます。照明が難しく、ワンカット撮るのに数10分かかることもしばしばです。撮影されたビデオは、数時間分もありますので専門家によって20～30分まで粗編集してもらいます。今度は画面を見ながら、テープに解説を吹きこみます。そのテープからシナリオを起こし、画面とシナリオの長さを調整しながら、最終的に15分番組にまとめていくのです。最後は録音。これは桶口一葉の作品朗読などで有名な幸田弘子さんをお願いしています。以上の工程で四、五日はかかってしまいます。わずか15分の番組ながら、それにかかる時間と労力は案外たいへんなものです。しかし事情の許すかぎり、当館ではビデオ番組の自主制作を続けていきたいと考えております。

大阪市立東洋陶磁美術館  
館長 伊藤郁太郎

◆第16回講演会要旨◆

『貿易陶磁の世界から見た  
中国民窯の染付』

日時：平成2年2月10日(土)

午後1時半～3時半

会場：中之島中央公会堂・3階中集会室

講師：藤岡了一氏

中国の元・明時代、最大の窯業地景德鎮で生産された磁器は、世界各国に輸出されました。特に日本には、色々特色のあるものが沢山来ておりますが、これらを見ますと、じつは明のある時期に限って、中国でも陶磁器史に暗黒時代があるということに気がきます。

明時代15～17世紀は永楽、宣徳、正統、景泰、天順そして成化、正徳、嘉靖、萬曆と移ってゆくわけですが、この中で正統、景泰、天順という時期のものがどうも分らない。とくに当時の景德鎮官窯、即ち皇帝の御用窯については不明といってもよいでしょう。

この時の天子はみな焼物に情熱を燃やすということをしなかったらしい。特に景泰帝は七宝に傾倒し、製陶に関しては、反ってこれを押えるようなありさまでした。景泰帝は七宝は情熱を燃やし景德鎮で使う上等の釉薬の材料を七宝に使ってしまうほどでした。そうすることが影響して景德鎮窯は衰退したということが言われています。また、それを裏付けるように景泰七宝には素晴らしい遺品が多く残っています。

戦後景德鎮にも、博物館—景德鎮陶磁館が出来、陶磁史の研究がはじまりました。官窯はともかくとして、民窯を採り上げねばならぬことがわかってきました。上記暗黒時代の墓地等の遺跡、更には窯址なども徐々に発見され、次第に成果があがっています。それに重要なことは、近頃、中国でも日本でも貿易陶磁の研究が盛り上がってきて、それが一つの潮流となってきたことなのです。

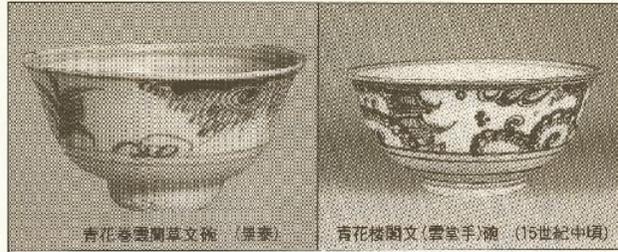
ところが、貿易陶磁を十分に研究するためには、官窯系の高級陶磁ばかりでなく他の陶磁をも重視する必要があります。景德鎮陶磁館、それに南京の博物館でも、それに気づき景德鎮の民窯、特にその染付を調べ始めました。

従来、軽視されていた民窯染付が漸く舞台上上がってきた観があります。

民窯の作品は、貿易雑貨として、予想以上大量に海外へ輸出されました。日本にも来ています。それからフィリピン、インドネシア、タイ、ベトナム、あるいはインド等です。更に、これらの外地には各所に華僑と呼ぶ商業に従事する中国からの移民が定住しています。



青花葵草文碗 (永泰)



青花葵草文碗 (景泰)

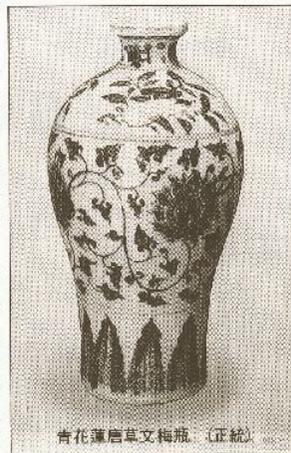
青花葵草文碗 (景泰手)碗 (15世紀中頃)

華僑は特にインドネシア、フィリピン、タイ、ベトナムに多く、しかも彼等華僑によって、その土地の商業が成りたっていました。そこでは当然、生活用具として陶磁器が大量に必要となり、景德鎮からの輸出量も次第に増加したことは想像に難しくありません。事実これら染付類の遺品はここ数十年、インドネシアを中心として、フィリピン、タイ等の各地から集中的に出土しています。

地方貴族の住居地、華僑の部落、船着場の浜辺、時には海中の沈没船等々から実にいろいろな染付が出てきます。例えば、インドネシアの大小の島々には華僑の部落が散在してきます。ところが昔から海賊による被害が非常に多く、大きい部落が全滅するようなこともありました。大事な食器などをまとめて地中に埋めたのが、後年ぞくぞく遺物として出てくる、このような独特の事情が近年まで続いております。

現在、そういうことをよく知る土地の人達や、華僑のなかにこれらの遺物を商品とする人達がかなりおるようです。私はこのような事情をきいていたものだから、それに、インドネシアと日本とは、わりあいに仲良かったので、インドネシア、シンガポールなどへ行きまして興味ある資料を見つかることができました。またその後、現地から古い民窯の染付を日本に持ってくる人達がいることを知り面白いポケットマネーでも、インドネシアからの珍しい資料を、わりあいにたやすく手に入れることが出来ました。しかし最近では、それはありません。

そういうことで私は暗黒時代といわれている正統、景泰、天順の染付が、インドネシアから出てくるのではないだろうかと思えるようになりました。ところが、近年インドネシアと中国は仲がうまく行っておりません。道が閉ざされて中国では、インドネシアからそういう物を輸入することが出来ない。そういう事情ですから、意外に色々な物が、インドネシアからこちらへ容易に入ってきました。我々は、こうして思いも寄らない染付を入手し、色々な資料に出会うことができました。



青花蓮草文梅瓶 (正統)

そのようなことで永楽から成化、正徳あたりの民窯の染付が漸く分かるようになってきました。大明成化年製の官窯は、小さい染付の杯一つでもとても手が出ません。しかし民窯の青花では、そのようなことはありません。では、一つスライドで御覧いただきましょう。特に景德鎮陶磁館長であった故朝野女史からお聞きしたことを踏まえながら、色々な成果を紹介したいと思います。

なお、只今開催中の呉須赤絵展につきまして、一言付け加えます。呉須赤絵というものは、なぜ日本に良い物がこんなにたくさんあるかと、これは、我々もちょっと考えなければならぬことだと思います。ある先輩が、\*この呉須赤絵というのは、案外にお茶人が好んでいる。で実際にお茶で呉須赤絵を使っておられる現場に出会うと、あの小さい呉須赤絵の香合、あれが素晴らしい。お茶席のあの渋い世界の中に、呉須赤絵のあの可愛い香合が、そっと置かれてある。それが大変お茶席を明るくして、非常にいいものだ。\*ということ、言っていました。確かにそういうようなことがあります。しかしお茶では、呉須赤絵のあの大きなお皿は使いません。皆小さな菓子鉢が、ちょっとしまった小ぶりの鉢です。

ところが一方ではあの大きな大皿がたくさん日本にあります。この大皿を面白い物だと言って採り上げたのが、戦争前に大変活躍致しました、東京の壺中居という中国陶磁の専門店、その主人の広田不孤斎さんです。この人は大変な目利きで、出身は富山県です。加賀から越中、越後の地方は、不思議に中国陶器のたくさんあるところ。そして不孤斎老人は、富山に、名品と呼ぶに相応しい呉須赤絵の大皿が沢山あることを小さい時から知っていたんですね。旧家の蔵には必ずあるとね。それで昭和の始めですが、不孤斎は秘にこれの所在を次から次へと突き止めて、富山県から新潟県の方に互る広い範囲に、呉須赤絵を漁る旅をしました。名人のかんというの、うまく当たるんですね。次から次へ名品を掘り出して、それを東京の岩崎家に納めました。戦後岩崎家では、それを私物化しないで、財団法人静嘉堂文庫を設立し、いろいろのコレクションと一緒にまとめて保存しております。

その名品の一部が此度こちらへ出品されています。静嘉堂文庫所蔵とプレートに書いてあるのがそれです。いずれもお話いたしました広田不孤斎が集め、岩崎家に納めた名品です。そういう背景をもった作品群であることを念頭において拝見していただければ結構だと思います。(文責：友の会事務局)

プロフィール

藤岡了一氏

1909年大阪生れ。大谷大学卒。京都国立博物館学芸課長、大阪芸術大学教授を経て、現在、奈良国立博物館調査員。著書は、「明の染付」「明の赤絵」(陶磁大系42.43)平凡社、「明初の磁器」(「宋」世界陶磁全集14)小学館、「茶碗」平凡社など多数。

